



「海援隊」の集合写真。左から3番目が坂本竜馬。©AFLO

## 魅力あるキャラクターの作り方

和田 竜 (小説家)

マイナスと思えるような部分をきちんと描くことで、人間像に奥行きをもたせる。これこそが登場人物を魅力的に見せる司馬遼太郎流のやり方といえる。坂本竜馬や土方歳三など、歴史に名を残した人物を数多く描いてきた司馬作品の本質に迫る。

歴史小説家という仕事柄、「子どもの頃から歴史が好きだったのですか」と聞かれることがよくあります。いつも期待に応えられず申し訳なく思うのですが、一〇代の頃は歴史にほとんど興味がありませんでした。小学校低学年の頃はヒーロー漫画やアクション映画にハマり、高学年になると映画『ねらわれた学園』（大林宣彦監督／薬師丸ひろ子主演、一九八一年）を観たことがきっかけで、原作者である眉村卓のSF小説を夢中で読んでいました。

中学・高校では星新一のショートショート作品なども読んでいましたが、どちらかというと小説よりも、漫画や映画のほうが好きな子どもでした。せいぜいNHKの大河ドラマかテレビ時代劇の『必殺仕事人』（テレビ朝日系）を家族で観るくらいで、特に歴史ものが好きだったというわけではありません。

歴史小説に触れたきっかけは、  
大学時代に読んだ『竜馬がゆく』

初めて歴史小説を本格的に読んだのは、大学二年生の時です。司馬遼太郎の『竜馬がゆく』を手にとったのですが、読もうと思ったきっかけは、それほどたいしたものではありません。

した。僕の名前の由来が「母の好きだった坂本竜馬」だったこともあり、「ゆかりのある人物の小説でも読んでみるか」という軽い気持ちからです。ところが、この小説が非常に面白く、全巻一気に読んでしまったことを覚えています。

司馬遼太郎の描く「竜馬」は、背が高く、喧嘩が強く、女性にモテて、さらに男からも好かれるという、「子どもの頃に読んでいたヒーロー漫画」に出てくるような人物でした。

自分の能力を存分に発揮し、周りからも一目置かれ、次々と難局を乗り越えていく。その姿に、「実在の人物を『物語』として書くと、こんなに面白いのか」と感じました。後述しますが、僕が作家になったのは、この作品を読んだからです。

『竜馬がゆく』で特に心に残っているのが、「竜馬が勝海舟に出会うくだり」（第三巻「勝海舟」）です。江戸で剣術修行をし、一度は土佐に戻った竜馬ですが、その後脱藩を決意します。京都を経て江戸に戻った竜馬は、攘夷に燃える千葉重太郎とともに「勝海舟を斬りに行こう」と赤坂元氷川下の屋敷を訪れました。しかし、いざ勝海舟に面会すると、「このところ刺客ばかりで、毎日何人もやってくるが、お前さんらは、連中よりすこしは上等だよ。話を聞いてから殺すな

り生かすなりしてやろうというんだから」と、二人は軽くなされるのでした。

やがて竜馬は、勝の「日本興国論」を滔々と聞かされたあとに、「勝先生、弟子にしてください」と思わず言ってしまう。これには重太郎も呆れました。

そのあと、京都で起きた「池田屋騒動」（一八六四年七月）、「禁門の変」（同年八月）と大事件が続くなか、竜馬は勝海舟の紹介で「西郷隆盛」と面会することとなります。おそらく司馬の創作なのだと思いますが、この場面も非常に印象的です。

竜馬は京都にある薩摩藩邸の一室で、西郷のことを待つように言われました。ところが、西郷が部屋へ行ってみると、そこに竜馬の姿はありませんでした。なんと竜馬は、西郷を待つている間に庭へ出て、鈴虫を獲っていたのです。「妙な男が来たな」と思う西郷も、虫籠を探してあたふたします。竜馬と西郷との会話の合間に鳴く鈴虫の描写が、当時の生活感をうまく表現しているなあと感じました。

このエピソードには後日譚があります。ひと月後、再び西郷のいる薩摩藩邸を訪ねた竜馬は、軒先にあの虫籠を見つけました。

待つあいだに、ふと軒端にまだ虫籠がぶらさがっていることに気づいた。しかもあたらしい草が入られ、朝の光のなかで鈴虫が元気によく動いている。見るなり、竜馬は目を洗われるような思いがした。

（まだあれを飼うてくれちよったか）

あれから一月になるのだ。よほど心をこめて飼わないかぎり、生命の弱い鈴虫など、とつとつに死んでいるはずである。

（西郷という男は、信じてよい）

と竜馬はおもった。西郷にすれば、別に鈴虫が好きなのではあるまい。竜馬がいつ来ても鈴虫が生きているように、入念に飼いでいたものにちがいない。（第五巻「菊の枕」）

西郷の心づくしを感じ、その人柄を信じるようになったエピソードですが、これには裏話があります。じつは竜馬が捕まえた鈴虫は、すでに死んでいました。しかし西郷は、竜馬が訪ねて来た時に、がっかりさせないようにと、家臣に頼んで新たな鈴虫を獲らせていたのです。

この時に竜馬が見た鈴虫は「三代目」でした。歴史上の人物の人情や性格が目につかぶような描き方で、素直に「うまいなあ」と思いました。司馬が描く竜馬は、勝海舟や西郷隆盛のよう

この続きは本誌でござい！